

Title	プラトンとミーメーシス( Digest_要約 )
Author(s)	田中, 一孝
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2014-03-24
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/doctor.k18013">http://dx.doi.org/10.14989/doctor.k18013</a>
Right	学位規則第9条第2項により要約公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

# プラトンとミーメーシス

## 論文要旨

本論の目的は、プラトンにおけるミーメーシス概念を調査し、それがプラトンの思想の中でどのような役割を果たしているかを明らかにすることである。

ミーメーシスはしばしば模倣や物真似、再現、表現、あるいはときに軽蔑的な含意をともなう模造やコピーとも訳されるが、プラトンはこのミーメーシスという活動に対して批判的であったとしばしば言われる。彼は『国家』篇のいわゆる「詩人追放論」において、ミーメーシスという営みに従事する詩人を理想国家から斥けた。この悪名高い議論によって、ミーメーシス概念は西洋芸術思想史において重要な位置を占めることになった。

近年の主要な解釈者たちは、本来ミーメーシスという概念が複雑であり一貫性を欠いていること、そしてそうした概念に立脚したプラトンの文芸論を統一的に解釈することは困難であることを論じている。本論では、プラトン以前におけるミーメーシス関連語の用例を詳細に調査することを通じて、ミーメーシス概念の基本的な性質、コア概念を取り出すことを目指した。そしてこのコア概念をもとにプラトンにおけるミーメーシス関連語の用例を整理し直すことで、ミーメーシス概念に基づいた彼の文芸論や芸術的思想の基本的な特徴とスコープを明確にすることを試みた。それによって本論は、プラトンの文芸論の多様性を強調するという近年の解釈傾向に対抗した。また従来の研究はプラトンの文芸論や芸術的思想に注目するあまり、それらとは関係のないミーメーシスの用例も文芸論の文脈で解釈する傾向がある。これに対して本論はプラトンの文芸論のスコープを画定することで、従来あまり論じてこられなかったプラトンの宇宙論的・存在論的議論における用例に焦点を当て、その哲学的な意義を指摘した。

以上の考察を通じて本論は、ミーメーシス概念史においてプラトンが占める位置、そしてミーメーシス概念によって基づいた文芸論、さらにはプラトンの宇宙論・存在論を支えるミーメーシス概念とそれが後代に与えた影響を明らかにしようとした。

本論は全 6 章から構成されており、各章の内容は以下の通りである。

第 1 章では、主要な解釈者たちの議論を紹介しながら、プラトンとプラトン以前のミーメーシス関連語群を再調査した。プラトンにおいて物真似、演技、音楽演奏、踊り、詩作、像製作など多様な文脈において用いられているが、これはプラトン以前においても同様である。そして解釈者たちは、こうした多様な文脈における用例を論拠にして、ミーメーシス概念の多義性を強調している。このような文脈に依存してミーメーシスの多義的な意味・用法を同定しようというアプローチに対して、本論ではミーメーシス系のタームが用いられる際の基本的な特徴を取り出すことを目指した。すなわち、ミーメーシスとは、ある「主体」

が、何らかのモデルを「対象」とし、モデルの代わり・表象としての「産物・結果」を生じさせるという三者構造によって基本的に成立する概念である。多くの用例では「主体」や「産物・結果」はそれぞれ省略されることが多いが、これは「産物・結果」が生まれる前と後という時間の導入することで説明ができる。こうしたミーメーシスの基本的な構造は、従来ミーメーシス概念の一貫的な理解を拒んできた多様な用例の中にも通底している。こうした調査を通じて、従来矛盾として捉えられてきたプラトン『国家』篇におけるミーメーシスの二つの規定、すなわち、演技・物真似活動に基づいたミーメーシスの規定と、像製作活動に基づいた規定を齟齬無く理解できることを本章では示した。

第2章では、プラトン『国家』篇におけるムーシケー論を扱った。プラトンは『国家』篇10巻において、ホメロス以来のミーメーシスに従事する詩人を追放する一方で、2巻や3巻の文芸論においては、詩を理想国家における重要な教育手段として利用している。こうした詩についての一見矛盾するようなプラトンの態度を理解するためには、文芸論を包含した形で展開されているムーシケーによる教育論を解明する必要がある。『国家』篇におけるムーシケー概念は教育論の中で「教養教育」として提出されたものの、重要な場面で「音楽」という意味にスライドしていることが指摘されている。本章では、ムーシケー概念の歴史的展開を確認した上で、「音楽」としてのムーシケーが論じられるテキストを吟味し、そこでの議論が「教養教育」の議論とどのような関係にあるのかを明らかにしようとした。そしてこうした考察を通じて、プラトンの文芸論がムーシケーの教育論、さらには理想国家の建設において占める位置を把握することを目指した。

第3章では、「詩人追放論」の中でミーメーシスを説明するためにプラトンが提出した、有名な「鏡の比喻」を論じた。絵画を鏡に映った像にたとえたこの比喻は、後の芸術的思想に多大な影響を与えると同時に、プラトンの芸術観が偏狭であると論じられる根拠ともなっている。というのも、絵画は鏡のように実物を表現するのみならず、自由な想像力によってより抽象的な事象を表すことができるからである。本章では鏡の比喻を再考することによって、絵画とは実物に対応する像なのではなく、絵画製作者の心的な現れ・像を実現する像であると、プラトンが考えていたと論じた。同様に、詩人などの摸倣家（ミーメーシスに携わる人々）もまた、心的像を対象として、その代わりのなる摸倣産物を生み出す。摸倣家を対象とするモデルが実物ではなく摸倣家自身の心的像であるとすれば、プラトンのミーメーシス概念に基づいた摸倣家批判は、従来考えられてきたよりも深刻な仕方で行われていたと言える。

第4章では、ミーメーシスという営みにおいて観察者が果たす役割、そして詩劇を観劇する観衆の心理について論じた。プラトンは「詩人追放論」において、ミーメーシスが成立するためには、ミーメーシスを行う「主体」、モデルとしての「対象」、ミーメーシスの「産物・結果」という基本構造をもとにしながらも、さらに観察者が必須の要素であると考えている。これは、画家や詩人たちが生み出す摸倣産物としての「像」が、観察者と独立に存在するものではなく、「これこれの人に現れる」ものとしての「現れ」とであるとプラトンが理解して

いたことに起因している。このように観察者に現れる像は、模倣家に現れる心的像に由来しているという点で、観察者の知覚的・心理的経験が、模倣家の知覚的・心理的経験とリンクするものとしてプラトンは描いている。このことを詩劇において理解すると、観衆の心理と詩人の心理がパラレルな関係にあることを示唆しており、その場合、詩人と観衆はミーメシスを成立させるための一種の共犯関係にあると言える。

第5章ではプラトンの中期対話篇の『国家』篇における模倣術と後期対話篇である『ソピステス』篇における模倣術を比較した。『ソピステス』篇において、模倣術の種である似像製作術は、「真正な均整」を塑像などのうちに作りこむことができるとされている。もしこの「真正な均整」が哲学的な探求の成果であるならば、『ソピステス』篇は言わば哲学的模倣家という存在を担保していたこととなり、これは『国家』篇の議論とは明らかに矛盾する。というのも、『国家』篇において模倣家は、哲学活動とは無縁の無知な存在として描かれているからである。これに対して本論は、『ソピステス』篇も『国家』篇と同様、模倣家は哲学に携わることはないことを明らかにする。そしてミーメシスに対するプラトンの批判は、模倣家というミーメシスに専門職業的に携わる人々の活動に向けられていること、言い換えれば、それ以外の人々による真似などの一般的な行為は、たとえ「ミーメシス」と呼ばれていても区別して考えるべきであることを論じる。このように、模倣家によるミーメシスとそうでないミーメシスを区分することによって、プラトンの文芸論は、模倣家による特殊なミーメシスについての理解に基づいていることを論じる。その上で、『法律』篇なども検討しながら、詩人や画家、音楽家などの模倣家は、哲学者などの支配者の監督のもとでミーメシスに携わるべきであると、プラトンは考えていたことを論じる。

第6章では、『ティマイオス』篇におけるミーメシス概念を論じ、その哲学史的な意義を明らかにしようと試みた。『ティマイオス』篇においては、デーミウールゴスという神的な職人が、永遠的なパラダイグマをもとにこの世界（コスモス）を整えて作ったと言われている。その際、コスモスはパラダイグマの模倣物（ミーメーマ）であると描かれているため、これを典拠に解釈者たちは、デーミウールゴスが神的・哲学的な模倣家であること、さらにはプラトンが神的・哲学的な詩作の可能性を認めていると考えてきた。これに対して本論は、ミーメシス系タームの用例を詳細に検討することを通じて、こうした解釈は適切ではないことを明らかにする。すなわち、『ティマイオス』篇のコスモロジーにおけるミーメシス概念は、模倣家の活動や模倣物製作とは無関係であり、むしろこの世界の事物が永遠的なパラダイグマに類同化するために、あたかも人間のように動的に振る舞う状況を描くために用いられている。こうしたミーメシスの意味・用法はプラトン以前には見られない一方、新プラトン主義の序列的な存在論的世界構造を説明するための重要な装置として継承され、定着していったということを論じた。

以上が本論を構成する議論となっている。もし本論の試みが正しければ、ミーメシス概念とは決して統一的に理解することが不可能な多義的概念ではなく、むしろコア概念を基にして理解できるという、一つの見通しを得られたと言える。プラトンは「詩人追放論」に

において、歴史的なミーメーシス概念に立脚しながらも、「現れ」や「像」などについての理解を背景に、観衆・観察者が重要な役割を果たす模倣家たちのミーメーシスを批判的に論じた。しかしながら、プラトンは哲学者・知者の支配のもとであれば、という例外的な状況での詩作を許しており、これがプラトンの詩人に対する基本的な立場であると考えられる。他方、本論は『ティマイオス』篇におけるコスモロジーにおけるミーメーシスの用例に着目することで、これまで着目されてこなかったプラトンのミーメーシス概念の重要な側面を明らかにした。そうしたミーメーシス概念の、後代へのより詳細で具体的な影響については、今後さらに発展的に論じることにはしたい。